

「求めよ、さらば与えられん」 マタイ7：7～12

I 導入部

おはようございます。3月の第一日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に、私たちの魂の救い主、イエス・キリスト様を賛美し、礼拝できますことを感謝致します。

今日は、3月3日、日本ではひな祭りです。ひな祭りは、ひな人形を飾り、ちらしずしやハマグリのお吸い物を食べて、女の子の健やかな成長を願う伝統行事です。ひな祭りの起源は、季節の節目や変わり目に災難や厄いから身を守り、より良い幕開けを願うための節句が始まりのようです。現在では、ひな人形は飾るのですが、以前は、ひな人形を川に流していたようです。紙や藁で作った人形に、わが身の罪や穢れを移して海や川に流し、災禍を逃れる行事が行われ、この人形の事を贖物（あがもの）と呼んだようです。

キリスト教とひな祭りとは、関係ないようですが、人形に自分の罪や穢れを移して流す、というような願望が人間にはあるのです。そのことを神様が実現して下さったのが、イエス・キリスト様の十字架と復活だと思うのです。

「求めよ、さらば与えられん」という言葉は、文語訳です。若者は「与えられん」を与えられないと否定的に考えることが多いのではないのでしょうか。今日は、マタイによる福音書7章7節から12節を通して、「求めよ、さらば与えられん」という題でお話し致します。

II 本論部

一、私たちの求めを知っておられるイエス様に願う

7節、8節を共に読みましょう。「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」イエス様は、7章の前の6章では、「だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」(マタイ6:31-33)と言われました。また、「また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多いければ、聞き入れられると思込んでいる。彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」

(マタイ6:7-8)と言われて主の祈りを教えられました。神様は、私たちが願う前から、祈る前から私たちに必要なものを知っておられる。だから、祈らないでいいというのではありません。神様は、私たちが祈る前に、願う前に、すでに私たちの必要なもの、願っている

ものを全て知っておられるからこそ、私たちは、神様に祈りたいと思うのです。

イエス様は、マタイによる福音書20章29節から33節の箇所、二人の盲人がイエス様に対して、「主よ、**ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください**」と叫んだ時、イエス様は、二人をわざわざ呼んで言われました。「**何をしたいのか**」と。盲人ですから目が見えるようになることが願いでしょう。イエス様は、彼らが願う前に、彼らの求めは、目が見えるようになることであることはご存知でした。それでいて、なお聞かれたのです。「**何をしたいのか**」と。盲人の二人は答えました。「**主よ、目を開けていただきたいのです**」と言ったのです。イエス様は、彼らの心からの願いを、思いを聞いて、深く憐れんで、目に触れて見えるようにして下さったのです。

イエス様は、私たちが願う前に、祈る前に私たちが何を求めているのか、何をしたいのか、を知っておられるお方です。けれども、「**何をしたいのか**」と問われるお方なのです。だからこそ、「**求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。**」とあるように、私たちは、私たちの必要をご存知であるイエス様に、求め続けたい、探し続けたい、門をたたき続けたいと思うのです。

二、神様は私たちに良い物を与えて下さる

9節から11節には、「**あなたがたのだけれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。**」とあります。

「**求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。**」というの、私たちが、自分の欲しいものを何でも手に入れることができるということを言っているのではないと思います。11節の後半には、「**あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。**」と、神様が私たちに良い物を下さるお方であることが記されています。

9節から11節には、父なる神様と人間の親との事柄が記されています。人間の親であるあなたがたは、「**パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。**」と言うのです。当時のユダヤはパンが主食でした。パンを焼いて取り出す時に、まわりについている灰の色は、石に似ていたように、また、石そのものがパンに似ていることから、また、ガリラヤ湖では、魚と一緒に海へびが釣れることもあったようです。また、このへびという表現は、うなぎではなかったということで、うなぎは、ユダヤ人にとって、汚れたものであったということから、子どもにパンと魚に似ている石やへびを与えるだろうかと問うのです。

不完全な人間の親でさえも、自分の子どもがパンや魚を求める時、間違っても石やパンを与えることはない。まして、愛と義において完全なるお方が、求める者に対して良い物を与えて下さることに間違いはないということです。

11節には、「あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。」とあります。私たちは、罪ある者、悪い者、問題や失敗の多い者、欠けのある者です。そのような者でさえ、子どもには良い物を与えるのです。まして、天の父なる神様、愛のお方が、私たちを子として愛しておられるのですから、私たちに良い物を与えて下さるのです。神様のお心は、私たちに、いつも良い物を与えたいと願っておられるということなのです。

三、祈りを通して神様との良き関係を築く

しかし、私たちがパンを求めたのにもかかわらず、石が与えられた。魚を求めたのに、へビが与えられたというような事を経験することがあるように思います。不完全な、罪ある私たち親が子どもにとって、良い物であると思って与えても、良い物でないということがあるでしょう。しかし、完全なるお方、私たちを愛し、大切にしておられる神様が、私たちが自分の思いで、自分の考えで石やへビだと思えるような物を下さることがあるのです。私たちが願ったものや祈ったものとは違うものを与えられることがあるのです。しかし、神様の原則は、良い物を与えて下さるという事なのです。

ここには、神様と私たちとの関係性が問われるように思います。信頼関係が問われるように思うのです。私たち人間でも親子関係、先生と生徒の関係、上司や部下の関係は、生きていくうえで、その関係がどうであるのかということは、とても大切なことです。親子でも、先生と生徒でも、上司や部下の関係も、信頼関係がないと良い関係でないと、言われた事や示されたことに納得がいかないと、示されたことに従ったり、行動することは困難です。いつか、その関係は崩れて、悪化し、分裂してしまうことになります。

神様と私たちの関係も、信頼関係がないと、自分が祈り、求めたりした通りに与えられないと不満が爆発して、神様に文句を言ったり、つぶやいたりしてしまいます。そして、ついには、祈らなくなってしまう。求めなくなってしまうのではないのでしょうか。

神様の原則は、私たちに良い物を与えて下さるという事です。それは、神様ご自身の私たちに對する愛から出るものです。けれども、私たちの側で、願った通りではないことや、求めている事柄であることに納得がいかないのは、神様との関係がよくない状態にあることを示しているように思うのです。

オリンピックで金メダルを目指す選手は、監督やコーチから厳しいトレーニング、自分が思わなかった、願ってもいない厳しいトレーニングでも、今メダルという目標のためには、忠実に従うでしょう。監督やコーチが、自分と同じ金メダルを目指していることを理解し、知っているからです。

神様は、私たちを愛し、私たちの最善をいつも願っておられるお方です。私たちの罪を赦すために、罪人の私たちを裁くのではなくて、私たちを愛しているがゆえに、私たちの罪の身代わりに、神であるお方、罪のないイエス様を十字架の上で裁かれたのです。イエス様は、十字架の上で、尊い血を流し、私たちの身代わりに死んで下さったのです。そのことによって、私たちの罪は赦され、魂は救われ、イエス様が死んでよみがえることにより、私たちにも復活の命、永遠の命、天国の望みを与えて下さったのです。ですから、神

様はいつも私たち一人ひとりのことを愛して、大切にしておられるということを信じることです。神様に信頼することです。自分が願った通りに、思った通りにならなくても、たとえ、私たちが驚くような、絶望するような困難や苦しみを与えられたとしても、神様は私を愛していること、大切にしていること、一番良いようにして下さることを信じて疑わない事です。これが、神様と私たちとの信頼関係を築くことだと思ふのです。今日の聖書の箇所、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」というみ言葉は、私たちが神様に求める、祈ることを通して、良き関係を築くことを示しているように思ふのです。私たちは、神様に祈り続けることで、神様との信頼関係が築き上げられ、神様の驚くべきみ業を体験することができるのです。

Ⅲ 結論部

今日の聖書の箇所は、「求めよ」と勧めるのです。私たちは何を求めるのでしょうか。ずいぶん昔ですが、今もこの言葉は、生きているのでしょうか。女性たちが、結婚相手に求めるものは、「三高」と言っ、高身長、高学歴、高収入というのがありました。それは、本当に幸せになるのでしょうか、疑問です。私たちは、私たちの事を何もかもよくご存じであるお方に、何を求めるのでしょうか。何を祈るのでしょうか。

ニューヨークのリハビリテーション・センターの壁に刻まれている一編の詩は、誰が書いたか分からない、といわれるこの詩は、この人自身が、苦しいリハビリの中で、又、命の終りが示されつつある絶望の状況の中で、どうして神様は求めるものを与えてくれないのだろうか、と、苦しみ悩み、闘いながら、やがて、神様を全面的に信じて、この信仰に達したように思ふのです。私たちもそうありたいと思ふのです。このような詩です。

「大きなことを成し遂げるために力を与えてほしいと神に求めたのに、謙遜を学ぶようにと弱さを授（さず）かった。より偉大なことができるように健康を求めたのに、より良きことができるようにと病弱を与えられた。幸せになろうとして富を求めたのに、賢明であるようにと貧困を授かった。世の人々の賞賛を得ようとして成功を求めたのに、得意にならないようにと失敗を授かった。人生を享樂しようとあらゆるものを求めたのに、あらゆることを喜べるようにと生命を授かった。求めたものは一つとして与えられなかったが、願いはすべて聞き届けられた。神の意に沿わぬものであるにもかかわらず、心の中の言い表せないものは、すべて叶えられた。私はあらゆる人の中で、もっとも豊かに祝福されたのだ。」

「求めたものは何一つ与えられなかった。」今の私たちの現実があるのかも知れませんが、しかし、「願いはすべて聞き届けられた。」と、「私はあらゆる人の中で、もっとも豊かに祝福されたのだ。」と神様は私たちに言わせて下さるお方なのです。このお方が、この週もあなたと共におられます。ですから、何があっても大丈夫です。安心して、イエス様に従って、イエス様に祈り求めましょう。祈り続けましょう。祈りを通して、ますます神様を、イエス様を信頼して歩んでまいりましょう。